

浄土

monthly
JŌDO

2013
April

4



平家物語断章

帰都将少

第三卷

年去り来たれども、忘れがたきは撫育の昔の恩、夢のごとし。尽きがたきは恋慕のいまの涙也。三世十方の仏陀の聖衆もあはれみたまひ、亡魂尊霊もいかにうれしとおぼしけん。

『観無量寿経』には計九品の往生の方法が説かれている。上品は經典をよく理解し出家をして戒をよく守り通すところに成就する。中品は出家をしなくとも在家に求められる戒を持ち、願生浄土の心が強ければ成就する。下品は願生浄土の心の薄い破戒の人間が救われる方法である。下品下生では、命終に臨んで十声にしかすぎなくとも、心から南無阿弥陀仏を称えれば、いかなる悪人でも浄土に摂取してもらえることが約束されている。

この文は 三尊来迎、九品往生の文字のある壁の前で死者の冥福を祈るくだりである。登場人物は七日七夜のあいだ、念仏を称えながら行旋した。

福島・小野

専光寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

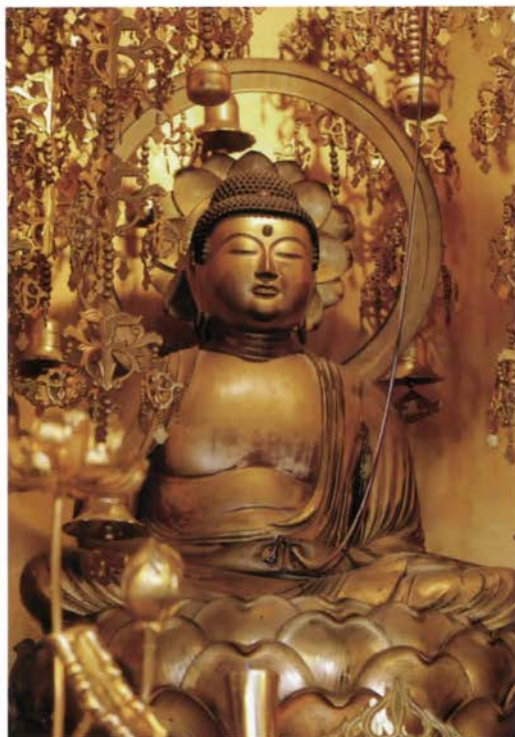
寺院紀行



客殿入り口に並ぶのは中央が専光寺第33世時田敏孝住職、向かって右が長男の時田倫孝上人、左が三男の時田暢彦上人。



小野山専光寺本堂。昭和62年11月に浄土宗福島教区第一回詠唱講習会が開催された時の記念写真。



本尊阿彌陀如来坐像。元禄時代に祐天上人に助力いたたき、京都の仏師に彫ってもらった木像の阿彌陀さまだ。

祐天上人の御名号。祐天上人が書かれる御名号は独特で、祐天名号と呼ばれる。



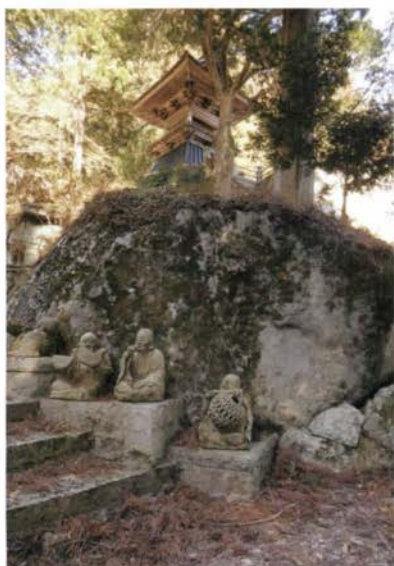
内陣の荘厳は時田住職が時間をかけて揃えたものだ。



東堂山の観音堂。馬の守り観音ということで、多くの参拝者がある。最近では受験の験の字に馬が入っていることから、受験合格祈願のお参りも多い。



毎年5月3日に行われる東堂山の例大祭。この階段は馬が登り易い幅で作っており、今も例大祭には白馬が登っている。



鐘楼堂の手前の石垣は大きな一枚石でできている。



「うつくしまの音30景」に数えられる音を鳴らす鐘楼堂の鐘。

御忌唱導師拜命の教書伝達式（一月二十五日）で、大本山増上寺法主八木季生台下から教書を拝受する時田住職。

堂宇緒像焼失の責任をとって断食して往生した
専光寺第9世良運上人木像。



専光寺第33世時田敏孝住職。町や浄土宗の要職を務められていることもあり、小野町にも浄土宗にも精通されている。



山門脇にはその回向の石碑が建ち、いまでも供養の大念珠くりが行われている。



時田住職が兼務住職の無量寺の阿弥陀三尊。平泉中尊寺、いわき白水阿弥陀堂と同じ定朝様式で、県の重要文化財に指定されている。

浄土

2013/4月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 福島・小野 専光寺	写真＝タカオカ邦彦	1
偉なる我が法然上人	望月信亨	6
寺院紀行 福島・小野 専光寺	真山 剛	14
会いたい人 小日向文世さん 上	関 容子	20
響流十方	袖山榮輝	30
連載小説 渡辺海旭	前田和男	34
江戸を歩く	森 清鑑	40
Jフォーラム		47
誌上句会	選者＝増田河郎子	48
マンガ さっちゃんねッ	かまちよしろう	51
編集後記		52
表紙裏・ 平家物語断章		
背表紙裏・ 泰雲の美味探訪		



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

アーカイブ浄土誌上ライブラリ
〔昭和十（一九三五）年『浄土』八月号より〕

偉なる 我が 法然上人

故・第八十三世知恩院門跡

望月信亨

昔から偉人といはれ、英雄豪傑と稱せられたものも少くないが、然し唯一時花々しい仕事をやつて、歴史上に其名を留めると云ふ丈けのものが多く、當代の人心を支配し、且つ後世に至るまでも感化を與へるといふ程のものは少い。其點になると宗教の教祖、派祖などいふ人は格別なもので、釋尊とか、基督とか、孔子とか、マホメットなどいふ人は、古來幾千萬人の精神を支配し指導し、今も尚崇拜の的となつてゐるのである。

日本に於ても多數の宗教家があり、宗派の開山開祖も澤山ある。皆それぞれの意味に於て偉人と云はれ、崇拜されて居るが、其中法然上人は日本佛教の改革者であり、日本の國民的宗教の建設者であると云ふ點に於て最も其の偉大であることが認められる。

法然上人の誕生は長承二年四月七日で、平安朝の終り、源平時代の初めであつた。其時代の佛教といふものは、大體に於て御祈禱佛教であつて、之を大にしては國家の爲に祈禱し、旱魃には雨乞ひ、雨が降り過ぎれば止風雨、病氣には延命、難産には安産の御祈りと云ふ風に、何事に就ても御祈禱が行はれた。是れは日本佛教の最初からの傾向であつて、主として藥師經、金光經の信仰から起つたのである。法隆寺の藥師如來は用明天皇の御病氣、釋迦如來は聖德太子の御病氣平癒の爲に造られ又藥師寺は天智天皇の御病氣の爲に建てられたもので、共に藥師經の信仰であり、又四天王寺、東大寺等は金光明經の信仰から建てられたので、即ち金光明經を讀誦すれば國家が平安になると云ふことから起つた。平安朝になつて傳教大師は比叡山を根據として天臺宗、弘法大師は眞言宗を開いたが、是れ亦國家平安の祈禱を主としたもので、比叡山は鎮護國家の道場、東寺は教王護國寺と名けられたのであつた。

斯様に佛教を信仰すれば國家が平安になると云ふので、皇室に於かせられて先づ第一に

御信仰になり、それから息災延命が出来る云ふので、貴族達も信仰し、寺領俸祿は給せられ、僧位僧官は設けられ、所謂寺は官寺、僧侶は官僧と云ふ有様であつた。其結果佛教は自然官僚式になり、又貴族的になり、且つ多くの寺領を賜つた所から漸次其勢力が増大し、寺同志の間に勢力争ひが起り、遂に戦争をする様にも成つた。其中で最も勢力のあつたのは、奈良では興福寺、京都では比叡山であつて僧兵を蓄へて常に横暴を恣にし、朝廷に對しても何か願ひ事があり、又は氣に入らぬことがあると、比叡山では其れが神意であると云ふ意味で、日吉山王の神輿を擔いで嗽訴する。興福寺では春日神社の神木を擔いで京都へ出かけるといふ始末で、朝廷でも實に持餘されたものである。白河天皇は朕の意の如くならざるものは、鴨川の水と、双六の賽と、山法師だと仰せられたといふことであるが、此御言葉から見ても、當時比叡山の山法師が如何に横暴であつたかを察し得るのである。

法然上人の誕生は即ち此の時代であつて、上人は父の遺言によつて出家し、十五歳の時比叡山に登られたのであるが、田舎に居られた時には、比叡山と云へば當時日本佛教の中心、鎮護國家の大道場と謳はれた處であるから、立派な靈域であらうと子供心に憧がれて居られたのであるが、さて實際に其山に登つて實情に接して見ると、餘りに豫想に反して腐敗墮落が甚しいので、大いに失望し、是れは眞の佛教ではない、却つて國家の爲に害のあるものだと考へられた。それから又祈禱をして果して病氣が治り、災難が攘はれたにしても、それは唯形の上の救で心の上の救でない。のみならず生者必滅であるから、人間と生れた以上は必ず死ななければならぬ。死後の問題は如何にすべきであらうか。

上人は若年ながら聰明であつたから、直に此點に著眼し、眞の佛道修行せんが爲に、十

八歳の時に黒谷に隱遁し、叡空を師匠として眞劍に學問を始め、それから南都などにも行かれて學者を訪問し、又一切經を五遍迄も讀まれ、ざんぜん嶄然頭角をあらはし、智慧第一の法然房、深廣の法然房と呼べる、に至つた。處が其時代の佛教は、一體に自力聖道門を開いて成佛すると云ふのであるから、智慧第一の法然房にも其修行が容易でない。たとひ又自分には其の修行が出来るにしても、一般の民衆には其の能力もなく、又時間もない。佛教と云ふものは一般民衆の信仰となるものでなければならぬ。即ち一般民衆の誰れにでも理解され、誰にでもが修行の出来るものでなければならぬ。學問をせねばならぬの、煩惱欲望を制せねばならぬのとすれば、それは一般大衆的のものでなく、特權階級の宗教にすぎないことでなくてはならぬ。自分の問題であると同時に亦一般民衆の問題であると。斯様な考から上人は更に其銳利な眼で聖教を御覽になり、いろいろ煩悶憂慮された結果、遂に四十三歳の時に至り、善導の觀經疏を見られて、始めて發見されたのが本願の念佛であつた。此念佛は別に學問も要らず、坐禪觀法も要らず、唯心に助け給へと思ひて口に名號を稱するのみで救はれるのであるから、如何なる人にも行ふことが出来る。又念佛には如何なる罪でも滅す力があるから、是れが即ち佛の大慈大悲のあらはれであり、これが眞の佛教であり、一般大衆の佛教であるとして、上人は飛立つ様に喜ばれたのであつた。

上人は此念佛が見出された時、振返つて過去を見、實に感慨に堪へぬものがあつた。是迄は智慧第一の法然房であつたが、學問や智慧では信仰に入る事が出来ぬ、學問の行詰り、智慧の行詰り、思索の行詰りを自ら痛切に感ぜられた。淨土門に歸してからは、愚痴の法然房、十惡の法然房となり、智者の振舞をせず、一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無知の輩に同じうして、唯一向に念佛する身となられたのである。

斯くて上人の進路が開けて來たから、京都に下つて一般民衆の爲に其の信仰を傳へられると、救世主のあらはれとして、我も我もと上人の庵室へつめかけ、御弟子も次第に殖え、九條兼實公を始め、公卿達も其教化に浴し、武士では熊谷直實、平重衡、宇都宮彌三郎などがあり、又鎌倉の尼將軍政子なども書面を以て教を乞ふといふ有様で、新宗の勢は旭日昇天の觀があつた。處が此の有様を見て比叡山や南部の僧達が黙つて居る筈もない。法然の新宗は諸宗を滅すものであり國家を亂すものであるなど、いろいろの個條を列べて念佛の禁止、上人の處刑を朝廷に嗾訴したので、遂に七十五歳の時、淨土宗は禁止となり、上人は流罪となり、弟子の住蓮、安樂は死刑に處せられることになつた。後四年を経て、上人は勅免を蒙り、建暦二年八十歳を以て、釋尊は四月八日誕生八十入滅、上人は四月七日降誕八十入滅で、實に奇しき因縁といふべきである。迫害は唯生前に於てだけでなく、滅後十五年目には比叡山から大谷の墳墓を發きに來ると云ふので、宇都宮彌三郎入道などが上人の遺骸を嵯峨に移すと云ふ騒ぎまで起つた。宗教の改革者の迫害を蒙つた事實は、基督にもルーテルにも又日蓮等にも見るのであるが、然し死後其の墳墓まで發かれるといふことは他に類似がない。然し一旦民衆の上に植ゑ付けられた新宗教の芽生えは、抑れば抑へる程却て反撥して、潜行的に深く人心の奥底に喰ひ込み、念佛は遂に國民的大宗教となつて、八百年後の今日迄日本國民の思想を支配し、指導しつゝあるのである。

法然上人は普通に淨土宗の開山と云はれてゐるが、然し今日の七千ヶ寺餘りの淨土宗の開山といふ譯では決してない。上人は所謂念佛の元祖であつて、今日の淨土宗は勿論、眞宗も時宗も凡べて念佛を申す宗旨は、皆上人を元祖とするのである。選擇集の中に上人が自ら淨土宗を立てると云つて居られるのは、聖道門に對する淨土門の意味であつて、今日

の所謂浄土宗だけを指したのではない、親鸞聖人を真宗の開山とするのに對して、法然上人を浄土宗の開山とし、同格に取扱ふ様なことは元より妥當でない。上人は要するに日本に於ける念佛の元祖であり、日本の國民的宗教の開祖であり、同時に亦舊佛教きゅうぶつの改革者である。此點に於て上人の偉大さが始めて認められる。又上人が一たび佛教改革の急先鋒として立たれたので、其後鎌倉時代には續々として新宗が勃興し、幸ひ平安の舊佛教は漸次壊滅して、日本佛教の形勢は全く一變するのである。歴史を緝く者は能く此點を注意せなければならぬ所である。

望月信亨(もちづきしんこう)

明治二年(一八六九)―昭和二十三年(一九四八)

宗教大学・大正大学の学長を歴任

仏教文化研究所初代所長

昭和二十年・浄土宗管長

第八十二世知恩院門跡

『法然上人全集』、『仏教大辞典』の編纂で著名。

寺院紀行

福島・小野

専光寺

撮影／タ力才力邦彦

文／真山剛



平成13年11月、専光寺第33世時田敏孝住職の晋山式が行われた。開門式を終え本堂に向かう住職。ただし平成2年には住職となっていて、だいぶ時が経っての晋山式だった。

行こか専光寺戻るか新地ここが思案の五条橋

「新地とは三軒あった遊郭のことで、迷っている五条橋は境内にあった京都鴨川の五条橋になぞらえた橋。ここ小野は昔から文化のある町だったのです」

とは平成八年から三期十二年間、福島県田村郡小野町の町議会議員を務めた小野山専光寺第三十三世時田敏孝住職。

お寺探訪記事の冒頭に遊郭だが、昔から神社仏閣参拝はその前後に遊興や美味美食がつきものとお許し願いたい。しかも確かに住職が言うように遊郭がある土地は交通の要衝、船着き場や宿場町といった人々の集まるところで、東北の名山阿武隈山系の山々に囲まれた山深き小野町だが、調べてみると福島、いわき、相馬を結ぶ中継地点で、かつ東堂山という東北を代表した観音霊場への入り口でもあり、人が集まり自然と文化が育ったところ、ということだ。

確かに、昼に御馳走に預かった創業百二十年の小野町老舗割烹の鰻重がこれまた美味で、洗練された蒸し、焼き、タレを誉めたら、住職が門前に三代続く日本一のラーメン店があるとのこと。まさに文化あるところにグルメありということだ。また、小野小町生誕の地の石碑があるかと思うと、リカちゃん人形の一貫生産オープンファクトリーのお城が町の中に聳えている、郡山から磐越東線に揺られておよそ一時間の小野町だが、驚き溢れる町である。



専光寺山門。町中にあるお寺らしく境内に隣接して家屋が建っている。

今回、この小野町の名利専光寺を訪れたのは、時田住職が四月七日に大本山増上寺の御忌で唱導師を勤められるからだ。時田住職は小野町議会議員三期目の任期を数ヶ月残したところで、国でいう国會議員にあたる浄土宗の宗會議員に就任。こうした歴史ある町の現役議員として注目され、その期待に違わず活躍し現在宗議の二期目を迎えている。その議会で機会があると、寺檀制度の崩壊や、ともすれば見放されつつある仏教を法然上人の教えである念仏で取り戻すための意見や提案を述べ、自分ができることは足元からと、故郷小野町から念仏を広めている最中での唱導師である。今回の御忌唱導師は巡り合わせと言いながらも、法然上人の威徳と報恩感謝の御忌に自然と気持ちが入る上に、父である先代住職がやはり同じように町會議員や宗會議員を、そして昭和三十三年には増上寺で御忌唱導師を務めていて、その足跡をなぞることができたという感無量の想いも重なってくるという。本番に備えた習礼で増上寺へ三度通うそうだが、まだ、緊張していて阿弥陀様や法然上人の御尊顔をゆっくり拝めていないという。本番ではその余裕も出てくるだろう。

さて、専光寺の成立は永祿年間（一五五八〜六九）に遡る。開山上人はいわきの専称寺第八世良潜上人の弟子だった良補善甫上人で、その経緯はこうだ。

善甫には兄弟弟子に良定袋中上人がいた。この二人のどちらかが



専光寺開基の田村右馬守の墓。専光寺の山腹墓地にある。法号は顯通院殿春林甫公大居士。

師匠の良潜の後任として専称寺、専称寺は名越派なごえという浄土宗にくつかある派の一つで東北地方を拠点とする名越派本山、その第九世となるはずだった。しかし、その直前に二人は宗論で仲たがいをしてしまう。それがきっかけで二人とも本山住職への道を断たれ、他山へ移らされることとなる。善甫は西へ、袋中は南へ向かう。袋中は最後には琉球に落ち着いたが、善甫は越後へ向かう途中に専称寺と並び立つ名越派の本山、いわきの如来寺開山良山の古跡を訪ねてこの地へやってきた。

そこで、宿を借りた主人より小野城城主の菩提を弔うためにと懇願され草庵を立てたのが、専光寺の緒である。そして開基は三春田村氏の分家である田村梅雪の子、田村右馬守顕通。顕通はすでに他界していたが、おくり開基として専光寺に今も墓が残っている。

交通の要衝だった小野の地は、この二代で終わった田村家支配のあと、周辺の権力者たちによって侵略を繰り返される。伊達、相馬、磐城、石川、佐竹、といった戦国大名が入り乱れることになる。歴史好きの方には大変面白いが、話を専光寺に戻そう。

二世冷南上人の時に境内地の寄進を受け、五間、九間半の寺を建立とあるがその詳細はわからない。そして、第九世良運上人の時に本堂が建立され、徳一作といわれる地藏菩薩像が本尊として安置され、良運は中興上人となった。浄土宗寺院の本尊にお地藏様、と

満福寺の本堂である阿弥陀堂。満福寺は無住になった後、庫裡が平成15年まで大学の合宿所として利用されていた。



満福寺の寺号塔だが、実際のお寺から5キロ近く離れた道路脇に建っている。かつてアリの行列といわれるほど参拝者が多かった名残だ。

訝しがる向きもあるだろうが、徳一とは法相宗の僧侶で、京都から東北に移り住み会津に慧日寺を建立。天台宗開祖最澄、真言宗開祖空海と仏教論を対等、いや対等以上に交わした名僧だ。その徳一開山の慧日寺は比叡山、金剛峯寺と並び称される名刹で、徳一は福島では仏教史上の大偉人で、その徳一作だから敢えて本尊として祀ったのである。また善導、法然兩大師像が造立、大門も建立された。

しかしここで悲劇が襲う。翌元禄五年（一六九二）に火事で、堂宇諸像の一切を焼失することになる。するとこの責任を取って良運が断食に入る。一月二十五日、法然上人の命日から食を断ち、二月半ばには信者に見守られながら往生した。専光寺ではこの断食を始められた二十五日を百万遍供養の日と決め、今でも毎月二十五日には大勢の檀信徒が集まり大きな百万遍の数珠を繰くっている。

こうした住職の姿を見たからだろうか、専光寺の復興は目を見張る早さで行われた。翌年、庫裡と二祖像が造立される中、本尊造立の為の万人講が組織された。そして本尊は磐城の名僧祐天上人の力添えもあり、京の仏師による本尊が造立、安置された。ちなみに専光寺に今も残る祐天名号はその時のもの。元禄八年（一六九五）には大鏡、翌年に半鐘、その翌年に十三仏が造立され、元禄十一年（一六九八）には仮本堂が落成している。時の住職、第十世の良生上人は再中興となったが、それにしても大檀越もない中で、一気加勢



東堂山の遠景。東堂山満福寺は裾野に近い山腹にある。入口には三春の滝桜に負けない古木の桜があったが数年前に強風で倒れてしまったという。

に伽藍や諸像が復興されたのはすごい。地元の人々にとつていかに専光寺が大切な心の拠り所であり、また地域で大きな役割を果たしていたかがわかる。しかし、復興の規模が大きかったからか、陣頭指揮を取った第十世良生は仮本堂落成の翌年、浄土に旅立ってしまった。

その後、専光寺は災害に遭うことなく、元禄時代の仮本堂と本尊阿弥陀如来坐像が伝わっている。仮本堂はそれほど大きくない礎石に乗っているが、一昨年の東北大震災で相当揺れたものの大きな被害を受けずに済んだという。また、仮本堂ということで文化財指定を受けていないが、三百有余年の歴史を持つ貴重な木像建造物である。現住職には四人の子供がいらして、上から三人は男で全員が浄土宗僧侶。長男である倫孝さんは、立て直しはせずに補修しながら、この仮本堂を護っていきたいと言う。

断食した第九世、復興に心血を注いだ第十世、このお二人が聞いたら、どれだけ喜ばれることだろう。東北の一山中に法然上人の法灯が紡がれ続けている。

さて、今回の取材にあたって、編集部で浄土宗寺院の名簿を見せてもらった。全国約七千のお寺が並んでいた。専光寺は福島の中央組に入っていたが、住職名欄を見ると、時田敏孝という名前が専光寺以外に三つも並んでいる。あれれ、と尋ねると、兼務しているお寺だそうで、無量寺、満福寺、そして稱名寺だ。最後の稱名寺は専



専光寺第二十六世が古文書を書き写したことで、往時の専光寺の様子が今に伝えられている。

光寺創建と同時期に建立された一般的な町寺だそうだが、良拾上人開山の無量寺の本尊は県指定の重要文化財で、平泉の中尊寺、いわきの白水阿弥陀堂と同じ定朝様式の古仏の阿弥陀三尊で、かつては境内に浄土庭園もあったといわれている。満福寺は東堂山満福寺と言いい、征夷大将軍坂上田村麻呂が祈願し、徳一が大同二年（八〇七）に開いた古刹である。東北は三春駒や田村駒で知られるように名馬の産地だが、東堂山はその馬守護観音で、往時は近隣はもとより全国からの参拝者で賑わい、祭礼にはアリの行列といわれるほど信仰を集めていた。今でこそ五月三日の例大祭に千数百人の参拝者にとどまるだけとなったが、由緒来歴や往年の参拝者数から東北を代表する寺の一つと言ってよい。

こうした古刹を時田住職が兼務しているには理由がある。満福寺も無量寺も専光寺開山の弟子である専称寺第十世の良拾がともに復興させているからだ。両寺の歴史を語りたいのはやまやまだが、連載しないと難しいので、再び住職の話に戻ろう。

時田住職は昭和二十一年に専光寺で生まれる。父であり先代であった時田得壽住職は福井県の造酒屋の生まれで、中央大学法科を出ながら、御母堂が仏教辞典で有名な望月信亨博士と血縁があることや、浄土宗僧侶の叔父の勧めもあり、浄土宗の僧侶になった。そして大阪のお寺に入っていたが、転任して専光寺の住職に。その六年

社長が小野近郷の出身ということから小野町中に作られたリカちゃん人形の一貫生産工場。工場ながら外観は可愛らしいお城で見学もでき、多くの観光客が訪れている。



小野赤沼にある無量寺。県の重要文化財である阿弥陀三尊像が祀られる阿弥陀堂で、樹齢約400年のしだれ桜が美しい。



前の昭和二年に事件の被害者となり遷化された先代田村碩光住職の後を継いだ。前述したが、先代も町議、宗議、知恩院と増上寺の唱導師を務めるなど、宗の内外で活躍されていた。

その父の命もあり、大正大学仏教学部浄土学科を卒業した住職は教師として一般社会に出る。私立の女子専門学校、県立高校で社会と国語を教えた後、郡山の自動車学校の相談員となる。自動車学校の相談員？ 当時は車ブームで誰もが免許を取る時代で、中には高齢で百時間かけても実習に合格できず、深刻な悩みを抱える生徒が多数いたという。その相談を受けていたのが、住職三十代前半の頃だった。一方浄土宗内では福島教区内の青年会基礎を築いたり、若平青年僧ながら教区や組の行事、各種法要に積極的に関わっていた。その後、前述したように町議や宗議となり、故郷や浄土宗教団を見してきた中で、今大きな憂いと願いを持っている。

「小野町は人口が最盛期の三分の二になり、専光寺の檀家も三分の二になりました。私たち団塊の世代がいなくなると、さらに一気に疲弊しますが、これは日本全体、仏教界も同じこと。その中で私たち浄土宗は法然上人の念仏で人々の心を安らかにし、その拠点となる寺院を護っていかねばなりません」

今度の御忌唱導師としての法要には、こうした想いを込める。時田唱導師の念仏に耳を傾けたい。

(ルポライター)



専光寺の歴代住職の墓。山腹の墓地にある。

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

去年十月、串田和美作・演出による『K・ファウスト』を観て、串田和美、笹野高史、小日向文世と、久々に自由劇場のメンバーが舞台に顔を揃えるのがなつかしかった。

小日向さんの役は、ピエロのカスベル。お客の前に立ちたくて仕方がない無邪気なカスベルが、ペラペラの紙人形のような動きで客席にだんだん近づいてくるところで、二次元の世界からふと迷い出てきた人物に出遭ってしまったような不思議な眩惑を覚えた。

小日向さんが言う。

「お客さんの目の前にあの役で出て行くと、あちらも無邪気に会ってくれるんですよ。カスベルと一緒にレベルになって見てくれる。それが嬉しかった。やっぱり串田さんの、おもちや箱を引っくり返したような、とよく言われる世界って魅力的だな、と思いましたね。ほかにないんですよ、ああいう脚本ほん書く人は、みんな劇団を離れて十年たってますけど、僕はパツとあの世界に入れたはずなのに、身

体が言うことをきかなかったり、どこかでプレーキをかけてる自分がいたりして、最初は悩みました。その上、串田さんが連れて来たフランスのサーカスの人たちは、選ばれた人たちだからみんなそれぞれ動きが素晴らしいですよ。その人たちが稽古場でパフォーマンしながら、カスベルの役を僕がどう作りあげていくか注目してる。その目が怖くって、いよいよ彼らの前に立つとなったら、震えましたからね（笑）。初日の何日か前は寝られないし、追いこまれたし、苦しみました」

そんな過程を経ているには思えないほど、小日向さんは芯から楽しそうで、とてもポエティックだった。

「近ごろ映像で自分を露出する仕事が増えてきてるんで、ナマの舞台ではどうやるの？ みたいなお客さんかなりいるわけです。すると、恥をかきたくないとか、下手に見られたくないとかいう気持を振り払うのが大変でした。役者がヘンに意識すると、舞台ではそ

デザイン学校に通っていた時に腕を骨折。
それがきっかけで写真学校を経て役者になる決心をした。



れがみんな見えちゃいますからね。生身なまみをさらすといくらメークしようと、総て見えてしまう怖さがある。映像では自分が演じてないところは映ひつてないけど、舞台では他人ひとがしゃべつていようと僕を見てようと思えば、ずうと見みてられるわけですよ。それが怖いんです」

小日向さんは去年の春、『国民の映画』（三谷幸喜作・演出）のゲッペルス役で、第19回読売演劇大賞・最優秀男優賞を受賞。ピエロのカスベルとは対極にある役どころも評価された。この賞は何人かの錚々たる顔ぶれの優秀男優賞の中から一人が最優秀に選ばれる。それでいてなお、舞台の怖れを語るところがいい。

昭和二十九年一月、小日向さんは北海道の三笠市で生まれた。別段、演劇好きの家庭に育ったわけでもないのに、なぜ役者をめざすようになったのか。

「十八歳のとき、スキーで骨折したからですね（笑）。順を追って話すと、父は三重県深山深いところの禅宗の住職だったんですが、戦後の食料難から、母が栄養失調でトリ眼になったんです。母の父は北海道の三笠の奥で町長をやったので、両親はそっちへ呼ばれて、父は役所づとめになるわけです。兄と姉が生まれて、末っ子が僕で、十八歳まで北海道にいました。中学三年のとき学芸会で選ばれて『リア王』の道化の役をやりましたね」

道化の役、というのが運命的な出会いのような気がするが、そこではまだ何も起らない。

「高校に入ったら油絵を描き始めて、むしろ絵の道に進みたかったけど、生活が難しそうだし、グラフィックデザイナーをめざして美大へ進むためには主要五課目が2ばっかりだから（笑）、これは無理。でも、父親は末っ子の僕には甘くて、『ふんちゃん』って呼ぶんですけど、ふんちゃんとは本当に勉強が嫌いなんだねえ、って笑ってる。それで入学試験

のないところへ、というんで、お茶の水の東京デザイナー学院に入るんです。その年の暮れに、スキーで腕を骨折。これが手術の失敗から何回も入院のくり返して、結局、二年間を棒にふることになりました。二十歳の時、もう一度一年生から復学するのだったらと、何となく憧れで、東京写真専門学校（現・東京ビジュアルアーツ）に編入。でも二年間学んで卒業目前になっても就職する気にならない。このまま写真の道に進むのは、何か違うなという気がしてきたのです」

でも、それがなぜ俳優に結びつくのか。

「卒業間近、じつと考えてて、もし好きなことやらしてもらえたら正直に何がしたい？って自分に問いかけたら、突然、役者、って出たんですよ。それまで役者になると発想すること自体が恥かしいと思ってましたけど、あまりに遠い存在でしたからね。でも、写真学校卒業して、二十二歳で文学座の研究所を受験するんです」

当時、文学座に籍を置いて多方面で活躍していたのが中村雅俊、松田優作といった人たちだったので、三十名の募集に何千人という応募の若者がつめかけた。

「上智大学が試験場でしたけど、一次で簡単に落ちましたよ。『ハムレット』の『尼寺へ行け』というせりふを読まされたのと、テーマを与えられてちよつと演じて見せる。一つは、道を歩いてて道端に一輪の花を見つけて、好き、嫌い、と花占いをやって突然深い悲しみに落ちる、というのと、もう一つは、サラリーマンが帰ってきて、電氣をつけると見知らぬ男が布団の中にいて、卒倒する。男の受験生はたいいていこつちを選ぶんですが、僕は少しでも目立とうと思って花占いを選んだけど、恥かしかつた（笑）。頭抱えて、『終りました』って言ったら、試験官二人も見られない、って感じでしたね」

小日向さんはそれから問もなく、中村雅俊の付き人になる。

「写真学校のとときアルバイトしてた原宿の喫茶店の社員さんが、コンサートの企画会社の社長と知り合いで、雅俊さんがコンサートのスタッフを探してる、という話を聞いたんで。しかし雅俊さんが、君、役者をめざすんなら早く養成所へ行ったほうがいいよ、って。あとで言つてましたけど、お前が役者として一人立ちできるとは思えなかつた、人前で何かやれるような人間にはとても見えなかつた、って。僕はすごい恥かしがりでしたから。でも役を演じるのはあんまり恥かしくなくて、人前に素で出て行くのは今もって恥かしい。でも串田さんがよく言うんですよね、役者は羞恥心がないとダメなんだ、って」

翌昭和五十二年春、自由劇場が研究生を募集していた。代表の串田和美と並んで、吉田日出子の名があるのを見つけて、すぐに応募する。

「北海道にいた十七歳くらいのとき、テレビ

の『木枯し紋次郎』に一回だけ出演した日出子さんを見て、その素晴らしさが目に焼きついてましたからね。役柄がそうなんだけど、風が来たらサツと飛んで行きそうな、可哀そうな存在。着物をだらしなく着て歩いてるんだけど、ものすごく幸の薄い、ちよつと足りないみたいなどころのある娼婦なんだけど、それが放っておけないような、思わず抱きしめたくなるような、童女のような不思議な感覚が入り混じってるのが脳裏にこびりついてしまった。それで当時の週刊誌、明星とか平凡で、デコさんがミュージシャン何人かと同居してる、という記事を読んで、へえー、ヘンな人だなと驚いたり、強烈な印象だったんでしょうね。

入所試験は、のちに僕が主役をやるようになる『西に黄色のラブソング』という芝居の長台詞を読まされたり、パントマイムをやらされる。日出子さんが、じゃあねえ、クラゲやって、とか、タコやってみて、とかその人の

居ずまいを見て題を出してるらしいんです」
いかにも線の細かった小日向さんには、何でもいから大声を出してみて、ということになった。

「仕方なく、北海道で入院してたころつきあった看護士さんと別れてまだ未練があったので、その名前を叫びましたね（笑）。終了して帰り際、もう二度と日出子さんに会えないだろうからと思って、握手しに行ったんです。ファンでした、って。それで受かった三十人くらいの中に入って、何か月かすると、『ロミオとジュリエット』の発表会があつて、その翌日名前が貼り出されてない人は、そこでさよならをする。結局僕は最後まで残って、そのとき自由劇場が発足して十一年目でしたから、解散するまでの十九年間、いることになるんです。

思えば十八歳のスキーでの骨折は、神様が、おまえの道はそっちじゃないよ、と言つてここに仕向けてくれたのだと思います」

小日向さんはここで初めて、一生をかけて向かい合っても決して飽きることないものに巡り合えた、と思ったという。

「お客さんをあんなに感動させて、人生まで変えちゃうことだってあるんだから、これは



あこがれの吉田日出子さんと一緒に芝居をした『上海パンスキング』での小日向さん（撮影／タカオカ邦彦）。



自由劇場で最初に主役となった『西に黄色いラブソディー』。

すごいことだ、と思ったんです。

日出子さんと僕が初めて同じ舞台に立ったのは、その年の秋の公演、『風吹がらす疾送記』です。斎藤憐さんが久しぶりに串田さんとよりを戻して書いた作品で、僕は百姓その

一（笑）。台詞はひと言。ラストに歌う日出口さんが素晴らしくて、隠れた所で見とれてた。

初めてデコさんと絡む芝居をしたのは、二年後（昭和五十四年一月）の『上海パンスキング』（斎藤憐作、串田和美演出・美術）初演のときです。僕は日本から来た学生上りのジャズメンで、宮下っていう役。ヒロインのまどかさんたちがようやく上海のダンスホールで順調に活動し始めたところに、僕が階段の窓のところで練習していると、まどかさんが上がってきて、大変よね、ヘンなところでしょ、上海って、と話しかけてくるんです。毎日、ドキドキしましたね、そこへ来ると」

あのころ自由劇場の看板女優、吉田日出子の魅力は一世を風靡し続けた。透明なのに粘り気のある強い声は不思議な官能性を帯びていて、その動きはどこかけたるそうदैて、いつもキラキラと輝いているのが魔法のように感じられた。

『「パンスキング」初演を前にして、六本木の自由劇場近くの和泉屋という喫茶店で、串田さんと野田秀樹さんが対談したのです。まだ夢の遊民社が発足したてで、野田さんは僕より一つ年下なのに、大先輩の串田さんと対等に話しているのが僕には眩しく思えましたね。そのとき僕は、お前、写真学校出なんだから、って、二人の写真を撮られました。

そのとき野田さんの発言で、この芝居は大変面白いけど、ウエルメードだから自由劇場にとつてはとても危険な作品だ、って言うのが理解できなかったんです。

串田さんは、斎藤憐さんと日出子さんと三人で、ジャズメンの話を芝居にしようよ、って話し合ってそこから出来上がって行つた作品だから、ものすごく思い入れがあるんですよ、あの作品に。

でも一方で串田さんは、この間の『K・ファウスト』のような作品世界が大好きなんですよね。起承転結がしっかりあってやるんじ

やなくても、つまりウエルメードじゃなくても、サーカスの人たちと一緒にあっていろんなことをやってるうちに何かそこで透けて見えてくるものがあるのだ、っていうそっちの人なんじゃないかな、と思う。

野田さんはあんなに若くしてそれをわかって、危険だよ、って言ったのか、いつか訊いてみたいですね」

小日向さんは、平成に入って『パンスキング』のシアター・コクーン六演めあたりから、徐々にその「危険性」に思い当るようになる。「渋谷の大きな劇場で、年輩のお客さんも『パンスキング』を観るようになって、ものすごく感動して帰るんですよ。ウエルメードイコールわかりやすい、ってことで、泣いたり笑ったりできて面白いからまた観たい、って。でも今思えばほかの作品に目が行かなくなるんですね。

たとえば『理由なき女殺油地獄』って、近松の原作を山元清多氏が台本・演出したもの

なんて、アンケートに、つまんない、わかんない、学芸会みたいだ、ひどいのは『パンスキング』さえやってればいいんだ、って書いてある。結局このことを野田さんは言ってたのかな、と思うんです。串田さんの作品のリアリズム演劇に対する強い抵抗感がすごく好きで、あのゴチャマゼの世界を支持する人も一方でたくさんいるわけですけどね」

演じることの醍醐味に小日向さんが目ざめたのは、自由劇場に入ってから五年目。昭和五十七年のことだった。

「この年に下北沢の本多劇場の柿落し（こけおとし）があった、斎藤憐さんは『斑鳩（いかりが）の祭』と『クスコ』という作品を同時に書いてて、どっちかを自由劇場に、と思ってたんです。

僕は串田さんと日出子さんが演技の上での父と母だと思ってるんですが、まさにこの二作品で二人から芝居にめざめさせられました。まず本多劇場の『斑鳩』ですが、日出子さ

んと僕は叔父姪の役で、姪が僕に思いを寄せ
るけどこっちはそれを退ける。すると日出子
さんが僕の剣をパツと引き抜いて自分の喉に
突きつける。思いが叶わなければ死ぬ、とい
う緊迫した場面ですよ。ところが通し稽古
のとき、その剣がパツと抜けなかったら、こ
んなもので芝居出来るか、って、剣をパキッ
と折っちゃった。あんなに身体が小さくて華
奢な人なのに、芝居がノックンゲ起したり、
やりにくかったりしたとき、彼女は狂気じみ
ますからね。全員の前でもおかまいなくダメ
出しをするし……。芝居は、デコさんが王家
に嫁いでしまうと僕の心が燃えて、王宮の中
にしのびこむんです。階段を駆け上がって彼
女の裾をつかむ場面があるのだけど、初日に
彼女は加減しないでどんどん行ってしまう。
もう必死で、待ってくれ、って駆け上がりま
した。僕が必死につかむ芝居になっていい
と舞台上でダメ出しをされたようでした」

一方、自由劇場では、『クスコ・愛の叛乱』

の初演で、小日向さんは皇太子の弟で阿呆を
装っているイヨノの役を演じた。

「これがうまくいなくて稽古ですつと悩ん
でました。休憩のとき、近所の定食屋へ行っ
たらそこに串田さんがいて、あそこさ、自分
の言ったことを面白がってバカが笑うシー
ン。クツと鼻を鳴らして笑ったら？ って言
ってくれたんです。そしたらそこから役作り
が総てうまくいきました。本番の舞台で、周
りに誰もいなくなる場面。阿呆とばかり思わ
れてた僕が、『油断するなよ』って、まとも
な声でボソツと言ったら、客席がウワツ、と
声を上げたんです。嬉しくってね。お客がだ
まされて驚いてる、この快感、っていうんで、
ウワッって、もうしびれましたからね」

(この項つづく)

至誠心しじょうしんというは真実心なり。真実というは、うちにはむなしくして、外にはかざるころなきを申すなり。

法然上人「大胡の太郎実秀へつかはす御返事」

至誠心というのは真実の心のことです。真実というのは、内面とは裏腹に外面ばかりを飾りたてようとする、そうした心のないことをいうのです。

もっとシンプルに

四月ともなれば桜満開なのだろうが、わが信州長野では開花したての桜の花に雪が積もることもある。信州の春は何度も冬に押し戻されながらやって来る。各地で記録的な積雪量となったこの冬、長野市は意外にも平年を下回った。とはいえ雪かきならイヤになるほどやった。雪には独特の静けさがある。夜明け前、胸騒ぎに恐る恐る窓のカーテンを開ける。ため息まじりに「またかよ」と舌打ちして布団をかぶる。そうは言っても、やらねばならぬものはやらねばならぬ。天気予報がはずれたり、一瞬春を予感した後の早朝の雪かきは体力気力ともに奪われる。この冬は、その繰り返し。妻の肘は腱鞘炎になった。

二月の末日。この日は、誰もが春の到来を予感する晴天だった。私は善光寺の北側に位置する町に、とある檀家を訪れていた。先代御当主の月命日のお経をあげるためだ。前の月、一月その日は、轍わだちのできた雪道にタイヤをとられないよう車を運転して参上した。でも、もうこの日はススイ。挨拶も「いつでも寒くってね」と言いながらも、「でも、今日は暖かいですね」と言葉が続く。気持ちだけでも春を先取りしたいのだ。しかし現実の冬は結構しぶとい。その帰り道、往路では背を向けていたその先に、善光寺さんのあの大きな本堂の後ろ姿を拝むことができる。地元で北参道と呼ぶ通りだ。善光寺の本堂は

T字型の撞木造りとして知られ、南北に長い東日本最大級の木造建築である。屋根の庇が上下二重にのびるお馴染みの本堂の姿は南向きの正面。こちらは長野駅から表参道として南北の上り坂となる通称「中央通り」をひたすら上って行けば、やがて大本願や宿坊を横目に仁王門をくぐり、仲見世を楽しみながら大勧進から山門を通り抜けたところで見上げることができる。

北参道は裏山から善光寺に向かう下り坂。そこから望む本堂は、北側の屋根ばかりが見える。その後ろ姿は空の一部を四角く切り取ったような、まさに巨大な壁。二月の末日。その巨大な壁は晴天の空に真つ白な四角をかたどっていた。そう、まだ屋根一面に雪が積もっていたのである。

本堂の正面、南側の屋根の雪はおそらく融けていたはずだ。何しろ陽の当たるところの雪はみな融けていたからだ。南向きは春の装いであっても北向きはまだ冬の顔。でも善光寺に変わりはない。春と冬が同居する。それが真実であろう。春とか冬とか、あるいは正面とか裏とか、そう区別するのは人間の勝手な決めつけかもしれない。

そうそう、拙寺のとあるお檀家の奥さまにこんな方がいる。ご近所の方だ。ある日、寺の墓地に面した、寺から見れば裏通りを歩いていた奥さまは急に立

ち止まって向きを変え、頭を垂れ、身じろぎませず、じいっと道路の側溝をのぞいていた。そして、やおら立ち去った。側溝に何かあったのか。たまたま見ていた私は不思議でならず、側溝のところまで行ってみた。何もなかった。

「？」であつたが、顔を上げて、ハツとした。目線の先、墓地の塀の向こうに、そう、そのお宅のお墓があるのだ。奥さまは、礼拝していたのだ。塀の向こうのご先祖のお墓の後ろ姿に向かつて。

奥さまにとって、それがごく当たり前のいつもの振る舞いだったのだろう。「本当に自分は先祖を敬っているのか」だなんて一々自問自答する暇すらなかったはずだ。いわば無意識に敬っておられる。とてもシンプルなのだ。

念仏往生を志すに三つの心構え「三心」が必要という。至誠心はその第一。「本音と建前」を使い分けられない心と言つてよい。物事には表裏がある。人間にも内外のある時がある。でも表とか裏とか、本音と建前とか、そういう区別はじつは私たちの勝手な思い込みなのではなからうか。もつとシンプルに、もつと無意識に念仏往生を志したい。あの日の奥さまのように。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第四十回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

ワグナーとシヨーベンハウエル



ワグネリアンの 楽劇合戦

哲人伯爵、ハインリッヒ・クーデンホーフ＝カレルギーが在日中に本邦初のオペラを初演、それがグノーの『ファウスト』であったことを知り、渡辺海旭は大いに興味をそそられた。そこで、それを哲人伯爵が選んだのは、材をとったゲーテの同名作品同様、「東洋的なもの」への憧憬があったのではないかと期待をこめて尋ねると、返ってきた答えは、「残念ながらグノーの『ファウスト』は換骨奪胎著しく、酒池肉林に溺れる身勝手な男の物語。そして、往時ともに朗唱に堪えられる歌い手は自分をいれてたった二人。それで演じることができるのは『ファウスト』しかなかったのだ」

海旭は自らが「俄かオペラ狂」ではないことを実感し、浅学を恥じると、当初望んでいた「仏教と哲学」へ論議を転じることは諦

めた。

哲人伯爵は往時を思い出したらしく、中空に目をやるとつぶやいた。

「あの日はちょうど、ミツコが次男のリヒャルトを生んで五日後だった。産後で私のメフィストフェレスを聴くことができなかった妻に演奏の首尾を訊ねられて、大成功だったと答えると、『パパ、それはよかった』とわが事のように喜んでくれて……」哲人伯爵は照れ的笑みを口の端に浮かべた。「いや、七人も子供をなすうちに、ミツコはいつしか私を『パパ』『パパ』と呼ぶようになって……」哲人伯爵は真顔に戻って続けた。「妻のねぎらいの言葉でつくづく思ったものだ。愛する妻という宝物をもらった日本に対して私は大したお礼と貢献はできなかったが、日本初のオペラという置き土産ができて本当によかった、と」哲人伯爵は日本人妻をよほど愛していると海旭は感じ、伯爵が回想にひたるのへ水を向けた。

「今もオペラを人前でおやりになるのですか」

「いや、今は人前ではやらぬが、家では毎晩
蜜声を張り上げては家族を大いに悩ませてお
る」と哲人伯爵は目を細めた。「妻のミツコ
からは、パパが歌うと城全体が揺れる、もし
パパが城主でなかったら、きつとオペラ歌手
として大成したにちがいないわ、と言われて
……まあ、妻の蟲眉目だろうがね」

哲人伯爵はボヘミアのロンスペルク城で、
仏教経典や哲学書をひもとかぬ日はたまにあ
つても、オペラを歌わぬ日はなかった。毎日
家族と夕食をすますと、子供部屋を回って相
手をし全員が寝入るのを確認してから、自室
で二、三時間、朗々とオペラを詠じて寝入る
のが日課だった。

と、哲人伯爵は回想から覚めて海旭に目を
あわせた。「ところで、ワタナベ君——」

またきた、今度はどんな謎かけかと海旭は
身構えた。

「バイロイトの祝祭劇場へは行ったことがあ

るかね？」と哲人伯爵は訊いた。「私は夏に
なると必ず家族をつれて出かけるが」

海旭は目を輝かせ声を弾ませた。「オペラ
に魅了されてからは、食費を切り詰めて旅費
をつくっては毎年出かけています」

「ほう、お目当ては？」

「ワグナーのタンホイザーです。おかげで名
場面だったら、いつでも暗誦できます」海旭
は嬉しさあまってつい個人的些事を吐露して
しまい、少々後悔した。

哲人伯爵の顔が輝いた。「そうか、私も大
のワグネリアンでね。よかったら、タンホイ
ザーの一節を披露してもらえないか」

逡巡をみせる海旭に、哲人伯爵は、周囲を
見回して言った。

「うっかりしていた。ここを歌劇場にするわ
けにはいかん。そうだ、酔いをさますために
も、ちよつと屋外に出て、そこで披露しても
らおう」

哲人伯爵に肩を叩かれて共に屋外に出た海

旭は、伯爵に再度「さあ」と促されて、「タンホイザー」の名場面、大行進曲の「歌の殿堂をたたえよう」を誦んじてみせた。

哲人伯爵はできばえに満足したようだった。

「ブラボー。日頃の読経のせいかなすばらしい声だ。どうしてどうして貴兄は『俄か』どころか立派な真正オペラ狂だ、真正ワグネリアンだ。大いに結構、結構。仏教経典とばかり格闘しては辛気くさい。たまにはオペラを吟じるのも学問研究の支えになる」哲人伯爵は海旭の肩を抱いた。「よし、今度は、私がワルキューレのヴォータンをやろう」

哲人伯爵は背筋を正すと朗声を発した。愛妻にオペラ歌手になれたと言われたのは嘘ではなかった。今や二人はすっかり意気投合、オペラ合戦と談義は留まるところを知らなかった。

*

ここで閑話休題。

日本における「オペラ初演」には諸説ある。

関根礼子編の「日本オペラ年表」によると、外国人による初演としては、「明治三年（一九七〇）在日外国人が横浜で『コックスとボックス』を上演」「明治九年（一八七六）ロネイ・セファス喜歌劇団が横浜・東京で公演」とあり、その後は「明治三十六年（一九〇三）三浦環らの『オルファイス』全曲舞台上演」を日本人による「初演」としている。

とすると、本稿で紹介したハインリッヒ・クーデンホーフリカレルギー伯爵プロデュースによる「ファウスト」をもって、外国人上演の嚆矢とするのは正確ではないかもしれない。しかし、前二者に比べると、より「本格的」であったことは間違いないであろう。

渡辺海旭にとっては「初耳」だったかもしれないが、海旭は哲人伯爵と万国宗教歴史学会で交流した六年後の明治四十三年に帰国、ちょうどその年から「国民新聞」に上田敏の小説「うづまき」の連載がはじまり、以下のくだりでそれを確認することになる。

「ずい分小池さんは古い事を御承知ですね。

それでは、ここで、いつぞやフォウストのオペラの真似をした晩の会を御存知ですか」

「学生の時でしたが、丁度あの辺の席から見物しました」と小池は背後を見上げながら、

「一体あの会は、赤十字社寄附の慈善歌劇といふのでした。日清戦争の最中で、威海衛（旅順の誤り、筆者）の取れた報知が、会のたけなはの頃にとどいたので、式部官が幕の外へ出て、報告に及ぶと、皆総立ちになって『君が代』を歌いましたでせう。式部職歐洲管弦部の伴奏で、国歌を歌ふ事は滅多に出来ません。」と言ひながら、一昔より前の記憶を夫人と共に辿っている。

「そう言へば、あの時悪魔に扮装した伯爵は、どうなさいましたらう。日本の婦人と正式に結婚をなさったそうですが。」

大楽聖と大哲人をつなぐ仏教

さて、時計の針を巻きもどし、哲人伯爵と若き東洋の学僧とのやりとりにもどらう。

東西ワグナー歌曲合戦とオペラ談義がひと段落したところで、伯爵はワインを一杯すると、おもむろに口を開いた。

「ところで、われらがリヒャルト・ワグナーが哲人シヨープンハウエルを尊崇しておって、その二人をつなぐものが何であつたか、貴兄は当然ご存知であろう」

「もちろんですとも。どちらも仏教に傾倒していました。理解においてはいささか『我流』のところもありますが」と海旭は答えて、はからずも、当初期待して裏切られつづけていた「仏教をめぐる知的談義」が突然やつてきそうな気配に驚いた。アテモノは向うからはずれる。待てば海路の日和とはこのことか。「そのとおりだ。しかし、大楽聖と大哲人とともに尊崇してやまない私からすると、残念

でならないのだが、二人は仏教ではしっかりとつながっている、こと音楽になると違ふ。大哲人は大楽聖の楽曲がお気にめさなかったらしい」

ワグナーはシヨーペンハウエル哲学に魅了・触発され、代表作「ニーベルングの指輪」を生みだし、それは「詩になったシヨーペンハウエル」と評されていることは「俄かオペラ狂」の海旭も知っていた。それなのに、捧げられた楽曲が当人にはありがた迷惑とは、これまた「初耳」だった。意外な表情の海旭を一瞥すると、哲人伯爵はつづけた。

「ワグナーは『指輪』ができるや、その劇詩をシヨーペンハウエルに贈ったのだが、大哲人は使者を通じてこう回答したそうだ。ワグナー氏は作曲よりも作詩の才能があるので、音楽はやめたほうがいいと」

「ならば、シヨーペンハウエル氏はどんな音楽がお好みなのですか」と海旭は身を乗り出して訊き返すと、伯爵は冷ややかに答えた。

「ロッシニとモーツァルトがお好みだったそうな」

「あのような明晰な音曲はシヨーペンハウエル氏の言説とは合わないように思えますが」

と海旭は返した。「どう考えても重厚晦渋なワグナーのほうが合うと」

「私もそう思う。そう思うが、人の嗜好と思考は必ずしも一致しない、これもまた人生の真髄なのだろう」

哲人伯爵はふうーっと大きなため息をついた。ここでせつかく生まれかけた知的談義が途切れてはならぬと、海旭は会話を前へ進めべく次なる問いを投げかけた。

「わが畏友の姉崎正治によれば、伯爵は若い時分からシヨーペンハウエルに傾倒されていて、それで御国の外交官には不人気な極東の島国への赴任をあえて望まれたとか」

「たしかに」と哲人伯爵は目を細めて遠くをみつめた。

(つづく)

第五十回

江戸を歩く



白山から
飛鳥山へ

森清鑑
大江戸ウォーカ―

この「やっちゃば」は道路拡張で昭和十二年巢鴨に移転、中央卸売市場豊島市場になるまで続いた。

五色不動

「やっちゃば」を過ぎると左側に定泉寺に続いて南谷寺なんごくじがある。この天台宗の寺こそ、江戸五色不動のひとつ、目赤不動である。伊賀(三重)赤目山から出土した、小さな不動明王像がご神体で江戸は下駒込に安置。江戸っ子の篤い信仰を集めた。三代家光が鷹狩りの際、当寺を訪れ、赤目不動を目赤不動に呼び変え、寺域を南西に移転新設。これが後の寛永寺の直末寺、南谷寺に発展する。

吉祥寺

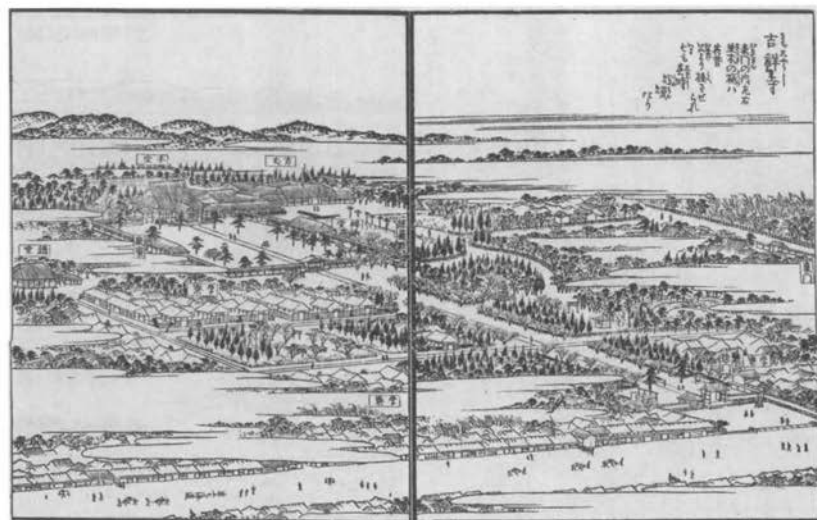
南谷寺から、さらに北に歩むと、いくらもしないうちに右側に門前町に挟まれた広い参道があり、立派な総門が控えている。総門を潜ると長い参道が続き、広大な吉祥寺の地域

が広がる。総門の右側に木立に囲まれた学寮。さらにその先、左側一帯が森に囲まれた広大な学寮が建ち並ぶ。やがて経蔵が見える。そこから大きな広場を囲んで渡り廊下が正方形に並び、中央の本堂につながる。本堂の裏手には方丈の屋根屋根が連なる。広大な木々に囲まれた靈域の感。吉祥寺は、江戸における曹洞宗の総本山である。開基は青巖周陽。元々は太田道灌が江戸城築城の折、西の丸の地に建立した。家康入府とともに駿河台に移転し、明暦の大火で焼失。そしてこの駒込村に移転した。江戸期は幕府学問所「昌平黉」と並ぶ漢学の研究地で多数の学寮が建ち並び、千人を超える学僧が修行。これが駒澤大学の元である。江戸時代は七堂伽藍を誇り、譜代大名、旗本の江戸菩提寺でもあった。

今、境内に八百屋お七と吉三の比翼塚がある。「やっちゃば」の南に隣接する、駒込片町の裕福な八百屋の娘、お七が密かに思慕を寄せたのが吉祥寺の寺小姓吉三。吉三会いた

さに火事騒ぎを起こす。結果、品川の鈴ヶ森刑場で火あぶりの刑。これを知った吉三は、僧西運と号した後、彼女の霊を弔うため、目黒行人坂の明王院（現雅叙園）から浅草観音までの四十キロを夜通し鐘をたたきながら念仏を唱え、一万日の行を二十七年半かけて行う。その満願の日、お七が西運の夢枕に立ち、成仏したことを告げる。そこで西運は明王院にお七地蔵尊を建てる。明治の廃仏毀釈で廃寺となった明王院は隣の大円寺に移行。そこに、お七地蔵と、お七の弔い行をする西運の姿を刻んだ石碑が建てられている。なお、西運は江戸市民から浄財を集め、行人坂に敷石道を造り、目黒川に石の太鼓橋を架けるなど、大変、徳の高い業績を残した。

また吉祥寺には、榎本武揚の墓がある。広い墓域である。榎本ほど時代の変貌の波に翻弄されつつも、幕府、新政府双方において活躍した人はいない。彼の生き方の核をなすのは、知識、技術の研鑽と類い稀な行動力であ



◆江戸名所図会 長谷川雪旦 吉祥寺全景。下の街道が御成道。

る。榎本は、江戸は御徒町で生まれた。昌平坂学問所で漢学を収め、ジョン万次郎の私塾で英語を習得する。長崎海軍伝習所で航海術、化学などの先端技術を学び、勝海舟の指導を受け国際情勢に通じる。学問の人、行動の人である。十九歳にして樺太探検に参加し、文久二年にはオランダに留学。親戦武官として実際に戦争を見、国際法、造船、操船を含めた軍事知識を高める。そして海舟の推薦を得て幕府海軍の総帥になる。本人は、人情家で涙もろく、あっさりした義理人情の持ち主。江戸っ子である。この性格が幕末の激動期に、彼の運命を翻弄する。しかし、卓抜な才能に加えて、若い頃から培った学問と技術が、維新後、敵であった薩長政府のもとでも異彩を放つことになる。維新時には、徳川幕府のために五稜郭に立てこもり、徹底抗戦。万策尽き、遺言のつもりで敵将の黒田清隆に愛説の国際法書籍を贈る。その後、海舟の説得を受けて投降する。これには江戸っ子同士の息遣

いが感じられる。新政府ができると黒田清隆は命をかけて反対を押し切り、逆賊どころか、この愛すべき人間を逆に新政府に招き入れる。黒田もえらい。そして新政府で北海道開拓に存分に才能を発揮し、農業の重要さを知り、東京農大の設立に努力する。榎本の心中には日本があつた。これは長崎伝習所時代、海舟の意をよく学んでいたからに他ならない。福沢は、五稜郭の戦いで彼を慕ってついでいき、死んでいった者に、なんとお詫びできようかと述べている一方で、彼の能力を認め、その行動力を賛美している。

駒込富士

吉祥寺山門を出て御成道を再び北に向かつて少し歩き、駒込富士前町の家角を右に曲がる。すると左側一帯が富士浅間社である。柵門をすぎると石の鳥居が見える。その前方に丘が聳そびえている。長い階段を上り詰めると頂上に浅間社が建っている。つまり、丘そのもの

のが人工富士なのである。周囲が下駒込村の畑のため、この人工富士は非常に目立った。

富士浅間社は、加賀前田家の上屋敷造営（東京大学）にあたり、当地に移行された。その後、江戸富士信仰の大きな拠点となり、特に六月の祭礼では夜を徹して参詣人が集まり大変な賑わいを見せた。その様子を雪旦は事細かに描いている。狭い境内は茶店や屋台が多数出て、江戸っ子は肩をふれあい、ひしめきあっている。ここは現在に至るも「お富士山」の愛称で親しまれている。

富士浅間社の右側に鬱蒼（うっそう）として広がる森が千駄木の御鷹仕込場。さらにその先には御鷹方同心組屋敷（駒込病院）。またその先にも、御鷹部屋があった。幕府鷹狩りの場である。家康はここでの鷹狩りを楽しんだ。周囲の駒込田畑は、茄子の生産で有名。そこで江戸で有名な川柳「一富士、二鷹、三茄子」が詠まれた。

六義園

日光御成道に戻ってさらに北に行くと、左側に広大な大和郡山藩柳沢家の下屋敷がある。二万七千坪に及ぶこの地を將軍綱吉から拝領した柳沢吉保は七年の歳月をかけて見事な庭園を完成させた。そしてつけた名称は古今和歌集からとった六義園。完成すると早速綱吉を接待する。綱吉がこの庭園を訪れた回数なんと五十八回に及ぶといわれる。時を経て柳沢家は甲府から大和郡山に転封となるが同家の下屋敷として明治まで続く。そして明治になると三菱の岩崎弥太郎が購入。昭和に東京市に寄贈される。幾多の天災もくぐり抜け、造園時の面影を残したまま現在に至った、希有な庭園である。

飛鳥山へ

六義園沿いの北角で道は二つに分かれる。右側の道が御成道。下駒込村の田畑を突っ切

つて北上する。やがて西ヶ原村。見渡す限り
 広々とした田園。のどかな光景である。やや
 あつて道の西一帯が無量寺（西ヶ原村の総鎮
 守）。惣門、広場、本堂の背後は小高い丘。
 鬱蒼と茂る森と崖を縫って階段を登り七の社
 を参拝する人々の姿を見る。

この無量寺東南、道沿いの西ヶ原村の畑が
 明治以降古河庭園になった。無量寺を過ぎる
 と西ヶ原一里塚が見えてくる（現存）。まん
 じゅう型の塚に木が一本。六石坂を下ると滝
 野川村。御成道の右側一帯が丘山になる。こ
 れが飛鳥山である。縦に細長い丘の地形は今
 もそのままである。飛鳥山といえば花見。吉
 宗はここに千本の桜を植え、江戸有数の花見
 の場所に変えた。花見の遊樂場所と言えは、
 当時は上野の寛永寺しがなく、場所が場所だ
 けに花見遊山の行動は極端に制限されてい
 る。そこへいくと、飛鳥山は何をやっても自
 由。飲めや、歌えや……で、現代の花見と同じ。
 当然、江戸っ子の足が向く。当初は吉宗自ら



◆江戸名所図会 長谷川雪旦 王子川飛鳥橋よりの飛鳥山全貌。下が溪谷と飛鳥山、中央に御成
 道と茶店が並ぶ。上は滝野川の畑。

宴席を設け、宣伝。花見の季節には江戸中から多くの観光客が押し寄せることになった（江戸から二里）。しかも景色が良い。西側は滝野川の田畑が拡がり、はるか遠方には富士山が、東側は眼下に王子川が流れる溪谷美、その先には音無川が蛇行している。北の遠方には筑波山が鮮やかに映る。下の御成道沿いには茶屋がひしめき、客が一杯やりながら見上げると一面、飛鳥山の桜並木。広重の絵を見ると、飲み食いする人、踊る人、土器^{かわらけ}投げする人の姿が克明に描かれている。落語の定番「花見の仇討ち」の舞台は、上野か、この飛鳥山と決まっている。貧乏長屋の四人が飛鳥山で一杯やろうと仇討ちを計画。二人が仇を討つ兄弟で一人は敵役。人が集まってきたところで一人が仲裁に入る仕掛け。めでたし、めでたしで観客も拍手。さすれば、この先、遺恨をのこしてはいけなと、誰かが酒を振る舞うだろう。当日、刀を抜いて双方やり合うまでは良かったが肝心の仲裁役が来ない。

騒ぎを聞きつけて駆けつけたのが本物の武士。義によって助太刀いたすと刀を抜いた。迷惑な話で三人はついに逃げだす。待て、待てと侍。下げは「なにしろ仲裁がこないんで」。



◆広重 飛鳥山北の眺望。毛氈を敷き花見を楽しむ人々。遠方は筑波山。

浄土誌上句会

●平

〔特選〕

吟行会平家の里の山ざくら

増田信子

あちこちに平家部落と呼ぶ集落があり、糸図や幟などを大事に保存している。そういう所だろう。平家谷という名があるように、多くは山間で吟行に適している。さて花見は主なのか従なのか、どちらだろう。

〔佳作〕

毛布干す平家落人部落かな

濱野東人

冬茜御堂鎮もる平林寺

庄内美知子

雪どけや肩胛骨は平らな骨

濱野具円

●家

〔特選〕

冬枯れや空き家に残る御真影

斉田 仁

古い家にはよく、亡き父母や祖父母の写真が欄間に飾ってあったし、これが天皇皇后両陛下だった。この家はもう住む人も居

ないのだが、欄間の御真影だけが残っている
のである。畏れ多いと言うべきか。

〔佳作〕 家系に一人加わりお正月

井口 琴

主家より昼餉の匂い菜花畑

井村善也

家柄も美貌も眩し花の宴

石原 新

●自由題

〔特選〕 焼き芋屋女子寮前の小商い

浜口佳春

人力車が自動車になり、呼び声もスピーカ
ーがつき、ついには録音されるなど、焼き芋
屋も進化したものである。この句のはそうい
うのか小店なのか。どちらにしても、女子寮
との取り合わせは絶妙である。

〔佳作〕 陽だまりに鞠となりたる初すずめ

早乙女喜栄子

強風によろけて歩く寒鴉

西嶋子青

たわいなく転ぶ齢や冬うつらら

山口信子



誌上句会〈編集部選〉

■平

光さす元旦の街は平らなり
山眠る寺の奥尽き平氏塚
寒の月映えて平らに凍てる道
平静を装い喪の身お元日
春の海どこまで行っても真つ平ら
きんとんを平らにならす長女かな
平らなる春を切り裂く曳航船
夕凍みに脚突き出して平家蟹
凸凹のビルの地平や初日の出
木村屋を平らげている春小袖
平和堂薬局前の春日向

早乙女喜栄子
當間あさ子
森 懷人
佐藤雅子
浜口佳春
笠井亞子
村松芳郎
小林苑を
月島駄々
鈴木伊豫
内藤隼人

■家

ひとつ家の古い見つめたる寒椿
竈神も許す家守の冬こもり
陽だまりや終の家とも住まいとも
藪入りや造り酒屋の家業継ぐ
家よりも外暖かし春の雨
家出して桜の墓地の一本道
寒椿家族写真が散乱す
箸袋箸置にして家長なり
親の家見えて雪夜の深さかな
寒の内家に帰りてまた詫びる
昨日まで古民家ありぬ寒日向
寒オリオン家出少年だったころ

早乙女喜栄子
當間あさ子
森 懷人
佐藤雅子
宮崎美代子
村松芳郎
立神貞華
笠井亞子
内藤隼人
中川 肇
山内桃児
金井 楨

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇一三年四月二十日
発表・『浄土』二〇一三年六月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

山寺のもみじ曼荼羅踏みまどう
夕映えの柿の実や七坪の庭
ハナの君枯葉のごとく往き給う
寺の猫仲良く往きし師走かな
着ぶくれて観音様に出会いけり
年賀状あいつはこで生きている
早よう食べ九十の母の雑煮かな
観音の裏に空あり枇杷の花
時計屋が二軒並んで雪の町
春昼にしろしを打つがごとく雨
早咲きの梅に結びし凶の籤
早春や間違いだらけの人選び

當間あさ子
森 懷人
佐藤雅子
飯島英徳
工藤 掉
福島赤土
豊島荒太
月島駄々
内藤隼人
富永洋治
尼野富美子
鈴木真理子

99

かい目

さっちゃんね

かまち♡ひろう



かまちひろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



もう一枚まといし身体に桜舞う 岱潤

私は正直な話しインターネットが苦手である。パソコンは仕事では使うものの、楽しみの道具にはならない。同世代や、少し上の世代の友人が器用にこなす姿を見てうらやましく思う反面、どうでもいいの気持ちでいるのが正直なところだ。特にツイッターとかつぶやきとか言われても、トイレの落書き程度にしか思っていないかった。

しかし先日野球のWBC日本対台湾戦の話聞いて、少し考えを改めなくてはと思った。試合の数日前、ツイッターで「台湾は東日本大震災の時に二百億円

もの援助金や支援物資、そして救助隊をどの国よりも早く送ってくれた国だ、試合を観戦に行く方は台湾に感謝のプラカードを書こう」という呼びかけがあり、これに呼応して当日何本もの「台湾謝謝」のプラカードがあがった。台湾の選手たちはそれに気づき、試合では逆転で敗北したもののテレビ放送終了後全員がマウンドのところに円陣を組み、観客席に向かって深々と一礼したそう。それに対して観客も大きな拍手で答えたという。またこうしたことが台湾でもニュースとなり、二年経っても恩を忘れない日本人々のことを、すばらしい人々と賞賛してくれているようだ。

雑誌「浄土」

特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 北山大超(焼津・光心寺)
 加藤亮哉(五反田・専修寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭行(大阪・一心寺)
 田中光成(町田・養運寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 真野龍海(大本山清浄華院)
 拙 博之(網代・教安寺)
 水科善隆(長野・寛慶寺)
 宮林昭彦(大本山光明寺)
 (敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

浄土

七十九巻四月号 頒価六千円
 年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十五年三月二十日

発行 平成二十五年四月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了咄

印刷所 株式会社 シーディーイー

〒一〇五・〇一一

東京都港区芝公園四・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三)五七八・六九四七

FAX 〇三(三三)五七八・七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二八七

「性急な返恩はかえって忘恩となる、知恩こそ恩に報いる道」という言葉を思い出す。改めて恩を知ることの大事さを、思い起こさせてくれるいい話だった。

(長)

編集チーフ
 編集スタッフ

長谷川岱潤
 斎藤晃道
 佐山哲郎
 青木照憲
 村田洋一

泰雲の

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

美味探訪



赤坂

コヒアアラビカ

4月は御忌の季節。

お念仏のご縁をいただいた一人として、法然上人への感謝の気持ちをもって芝の増上寺を訪れ、周辺の桜をゆっくり愛でながら帰途につきます。赤坂のみすじ通りに寄道。一杯の珈琲をもとめて46年という『生きている珈琲・コヒアアラビカ』にお邪魔します。階段を下り、磨きぬかれた店内に入ると「お茶の世界」とも重なる静寂な空間が迎えてくれます。

アラビカの珈琲は、最高級な生豆を熟練された技術によって焙煎。丁寧なネルドリップによる上品な酸味と苦味、そして良質な甘味。利休は「茶は服のよきように点てる」とおっしゃいましたが、『コヒアアラビカ』の珈琲も同じように感じます。私はいわゆる通ではありませんが、はじめてお店で頂いたウィナーコーヒーの美味しさ、最後まで崩れないクリーム、コンソメスープ色の浅煎りのモカマタリ、香りと飲んだ後に残る甘味にただ驚いていました。

尚、店名の『コヒアアラビカ』は、コーヒーの木の三大原種の1つアラビカ種からとお聞きました。アラビカ種の豊かな風味、酸味を焙煎すると酸味が和らぎ、香り、苦味、甘味が引き出され、奥深い豊かな味わいになり、ブラジル・コロンビア・モカ・ガテマラ・マンデリン等はこのアラビカ種になります。



東京都港区赤坂3-18-2 B1F (みすじ通り)

☎03-3582-1827

営業時間 11:00~24:00

定休日 年中無休

新

刊

案

内



関東十八檀林 ガイドブック

いまよみがえる関東巡礼の旅

江戸時代に浄土宗僧侶の養成を目的として選定、創建された十八の古刹や名刹がついに一冊の本になりました。単立寺院となった二か寺を含む関東各地の十八の寺院を取材、その歴史から今に伝わるエピソード、さらにお寺巡りや団体参拝に役立つ周辺の見所や食事処、加えて詳細なアクセスマップに各寺院の基本情報も掲載された手元に置いておきたい待望の一冊。また、巻末には江戸時代に十八檀林参拝の様子を記した撰門の『檀林巡路記』の現代語訳抄も掲載されている。



《十八檀林》

東京	増上寺	傳通院	幡随院	靈巖寺	靈山寺	大善寺
千葉	大巖寺	東漸寺		群馬	善導寺	大光院
茨城	大念寺	常福寺	弘経寺(瓜連)	弘経寺(結城)		
埼玉	浄国寺	勝願寺	蓮馨寺			
				神奈川	光明寺	

発行：関東十八檀林霊财会
A5版／カラー96頁
定価：800円

※本誌のお求めは、
法然上人鑽仰会 電話03-3578-6947 Fax03-3578-7036
または各檀林寺院、浄土宗出版室でもお求めいただけます。